

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K00801

研究課題名(和文) 東日本大震災後の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法

研究課題名(英文) The solution of the subject about clothing life in the reconstruction of their lives after the Great East Japan Earthquake

研究代表者

佐々井 啓 (SASAI, Kei)

日本女子大学・家政学部・研究員

研究者番号：60017241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災の被災者たちが生活再建を目指して行った活動について、仮設住宅に集まった女性たちにインタビューを行った。生活上の不便さや、多くのものを失った心の痛みから立ち直ろうとする人々が行ってきた活動について、現地でのインタビューを行い、手芸活動に関わる事例をまとめた。その結果、女性たちは趣味のグループとして手芸活動をしており、それらはいくつかのグループに分化していったことが明らかになった。それらは 趣味のサークル NPO法人の組織 一般社団法人を設立 その他に分類できた。このようなさまざまな活動への展開がみられるが、収入を得ることが目的ではなく、創造の喜びが支えであったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東日本大震災の被災者たちの生活再建に関して、さまざまな支援活動が展開されていた。しかし、長期にわたっての支援はしだいに縮小してきていることを注視して、支援ではない現地の女性たちの震災後のグループ活動に焦点を当て、インタビューを行い、新たな視点からの考察を試みた。その結果、女性たちのグループ活動の実態を明らかにし、手芸や裁縫などによる身近な作品の製作を通して、被災者たちの心のケアや生きがいの創出につながったことを見出すことができた。また、それが収入を得る手段として発展していった事例も把握できたことは、単に物資を調達するのではなく、被災者支援の在り方について新たな方法を生み出すことができた。

研究成果の概要(英文)：In the Great East Japan Earthquake, many people lost all means of living. However, they were active in various activities aiming at reconstructing their lives. This research was held at the affective areas of the earthquake and we studied the details of their activity and their feelings behind the activity, focusing on their activity of handicrafts. There are many such groups and those groups can be classified into four groups below: 1. voluntary group, 2. non-profit organization, 3. general incorporated association, and 4. others. Although all the groups sold their products at bazaar or as NPO or incorporated association, their purpose of handicrafts was not only to earn money but also to share the pleasure of creation with members of handicrafts.

研究分野：衣生活学

キーワード：東日本大震災 生活再建 衣生活 ものづくり 手芸

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後、さまざまな支援がなされてきた。それらは生きるための支援で、基本的にはもっとも必要であったことは明らかである。しかし、発災後数年を経過してくると、それまでの生活を取り戻すことが重要となってくるのが現地調査より明らかとなった。

そこで、被災者の生活再建の支援として衣生活の現状と課題解決についての研究を行う必要性があると思われた。

2. 研究の目的

すでになされてきた震災時の衣料品の支援物資についての調査を再検討し、災害時の衣服について、どうあるべきかを検証する。次に衣生活の実態調査を仮設住宅から災害復興住宅へ移住した方々を対象に行い、その結果を踏まえて、衣生活の問題点とその解決方法について検討する。さらに生活支援センターなどを通して、高齢者の衣生活の実態を明らかにし、衣服をとおした「生きがい」の創出とはどうあるべきかを検討する。

3. 研究の方法

(1) これまで各研究者が地域で行ってきた活動を基盤として、研究対象地域を設定してインタビュー調査をおこなってきた。調査の結果浮かび上がってきた衣生活の問題点について、人間が生活していく上で必要な衣生活が震災直後にどうであったのか、衣料品の支援物資がどのように生活の中で生かされていたのか、また、どうあるべきか、という課題について、地域住民の意識と行政支援の立場から検証することとした。

(2) アンケート調査やインタビューを通して、被災地での高齢者の衣服の入手方法の変化を把握するとともに、単に所持衣服の量的な調査ではなく、衣服に込めた「思い」や装うことによる「生きがい」という精神的な効果を明らかにすることを目的とした。

(3) 仮設住宅や集会所で続けられてきた手芸教室のグループのインタビューを行い、設立の経緯と現在の活動についてまとめ、検証することとした。

4. 研究成果

(1) 支援物資については、必ずしも望ましいとは言えないということであった。実際には、新品の下着は助かったが、古着は必ずしも着られるものばかりではなく、とても悲しい思いがした。仮設住宅を出る時には、すべて捨ててしまった、という声も聞かれた。ただ、支援の衣料品には、いつも着ていなかった形や色のものがあり、皆が明るい色の衣服を着るようになると、気分が晴れやかにもなった、という感想も聞かれた。

(2) 衣服に込めた「思い」をインタビューした結果、それぞれの「思い出の衣服」について語られた。思い出の衣服については、季節の衣服、家族の衣服、式服について、それぞれをまとめた。

季節の衣服

その季節になると思い出す衣服があるといい、日本の四季に根差した衣服の着装の習慣があることが示された。例えば、正月の晴れ着、花見の頃の衣服、秋や冬の防寒着など、その季節が来ると、自然と持っていた衣服を思い出してしまうが、それらすべてが失われたことを思い出すことが悲しい、と言われた。すなわち、衣服は、季節感を表し、それぞれの季節の行事を表していたといえよう。

家族の衣服

母の着物コレクション、叔母の縫った着物など、家族にまつわる衣服が強く思い出される。特に家族の行事(入学、卒業、成人等)のそれぞれの場面で、その時の衣服が思い出されると語られた。特に、娘の成人式の晴れ着の振袖を自分で縫って着せた思い出はいつまでも忘れることができない、と述べられた。

式服

特に喪服についての思い出が多く語られた。式服として夫がその兄弟から譲り受けていた礼服が、図らずも兄弟の葬儀に着ることになったのは悲しかったが、思い出として大切にしていきたい、ということが語られた。

衣服は直接身に着けるものであり、人は成長する過程において、さまざまな衣服を身に着けてきた。実際に着装した衣服をすでに用いなくなっても、さまざまな場面でその時に着ていた衣服を思い出すものである。「思い出の衣服」は、震災によって突然失われたことにより、「衣服に別れを告げる時間の経過がなかった」ことと、「人や生活の別れが衣服への思いに重なった」ことであるといえよう。

(3) 手芸との関わり

避難所で出会った方々が、仮設住宅に移住後や、さらに新たな住居に移転後も続いて手芸グループを継続している。それらは震災当初から現在まで、さまざまな活動が行なわれていることが明らかとなった。

以下に調査をおこなった地域を記す。

宮城県名取市、石巻市、元吉郡南三陸町

岩手県釜石市、陸前高田市

岩手県宮古市、上閉伊郡大槌町

福島県相馬郡新地町、南相馬市

女性たちは趣味のグループとして手芸活動をしており、それらはいくつかのグループに分化していったことを明らかにした。

それらは次のように分類できる。

趣味のサークル 「東北マダムズコレクション」に参加 NPO 法人、一般社団法人を設立

被災後 10 年近くを経過しても継続しているグループが存在していることは、手芸という共通の目的がさまざまな要素を含んでいると考えられる。すなわち、最初は仮設住宅での仲間作りや小さな日用品の製作による時間つぶしであった手芸が、やがては日常生活への一歩としての役割を持ってきたのである。インタビューでは、一心に何かをすることでつらいことを忘れられるという声が多く聞かれた。ものづくりは、新たな生きがいを生み出す手段としての役割を持っていたと考えられる。以下に調査結果を報告する。

趣味のサークル

a. 仙台市 「はぎの会」

全員が被災した蒲生地区の避難所で出会う。仮設住宅に移転後、さらにそれぞれの住居に移住後に、被災地に近い福祉センターで活動している。以前はバザーなどで販売していたが、現在は作品の展示発表を主としている。

b. 大槌町 「手作り工房おおつち」

避難所で汚れた支援物資から布の小物入れの袋を製作したのがきっかけだそうである。仮設住宅に移転後、支援物資の毛糸や端切れで手芸教室を開催し、支援してくれたボランティアの方に感謝の気持ちを伝えたいという思いから小物作りに取り組み、それが内職プロジェクトとして売上金の半分以上を賃金として得ることにつながったという。2015 年より藍を栽培し、藍染めから作品の製作をするプロジェクトを継続している。

「東北マダムズコレクション」に参加

2011 年「ふんばろう東日本支援プロジェクト」が活動を開始し、その後、「ものづくり」に特化した「ふんばろうものづくりプロジェクト」のグループの形成を経て、2016 年「東北マダムズコレクション」が結成された。

a. 石巻市 「カーネーション」

震災から 1 年後に「縫い物を教えてもらえないか」という依頼があり、2012 年 4 月より福祉会館で活動を開始した。当初は支援物資の着物、帯、布、ニット地などで衣服や小物を製作していたが、現在は材料を購入し、作品展に出品し、販売している。売り上げの一部を「はたち基金」に寄付している。

b. 福島県新地町 「うみみどり」

2012 年に仮設住宅で支援物資のアクリル毛糸を使ったエコたわしを編むグループを結成し、その後、福島県の伝統的な会津木綿や古布に刺し子を施した小物、アクセサリーなど、地元福島にこだわった創作を行っている。

c. 福島県 会津若松市 「會空（あいくう）」

原発事故の大熊町から避難したグループが、大熊町のマスコットキャラクターである熊のぬいぐるみを地元の会津木綿を用いて制作販売している。企業の「JAL 東北応援プロジェクト」に採用されて海外での評価も高い。現在は離れて生活を営むメンバーが、それぞれの居住地でぬいぐるみのパーツを作成し、会津若松市の工房で製品として仕上げ出荷していて、通販サイトにも掲載されている。経済的な自立を目指している。

d. 「ネクタイベアファクトリー」

2014 年 4 月に、「ふんばろうものづくりプロジェクト」の活動のひとつとして、首都圏に避難している女性たちが支援を受けながらネクタイを材料とする「ネクタイプロジェクト」を立ち上げた。2015 年には活動に対する支援のお礼として、眠っている父や夫の思い出のネクタイでティベアを製作するファクトリーを結成し、ペンケースや小物作りの講習会をも開いて、一般の人々にも技術指導を行っている。

NPO 法人、一般社団法人を設立

手作りの集まりから始まり、積極的に生産活動を行うためのさまざまな取り組みを果たしているグループがある。商品としての一定の水準を保ちながら、幅広く提供できる作品作りがなされている。

a. 岩手県 「大槌復興刺し子プロジェクト」

ボランティアの方が避難所の女性たちに「刺し子」を勧めたのがきっかけとなって始まった。NPO法人の「テラ・ルネッサンス」とつながって安定した仕事が継続され、製作者の収入となっている。複数のアパレル企業とのコラボレーションやノベルティとしての活用など、間断なく仕事が入る状況にあり、落ち着きながらも活況を呈している。また、グループは、地元の高校から家庭科の授業に招聘されたり、修学旅行の生徒にワークショップを実施したりするなど、要請に応じて「刺し子」を教育活動にも繋げている。

b. 「陸前高田はまなす会」

「ふんばろう東日本支援プロジェクト」が2011年8月に南三陸で布ぞうりの講習会を開催したのがきっかけとなり、2012年、陸前高田・石巻・東松島にも布ぞうり製作のグループができる。2012年11月、「一般社団法人あゆみ」を立ち上げ、地元の製作者と東京の販促活動する法人との分担・連携がしっかり継続している。2017年、他の被災地域や首都圏の難題を抱えた人たちへの生計維持を目的とした支援の一環として編み手の育成を行い、多くの販売実績がある。

(4) 考察

これらの地域の調査、検証により、衣生活の問題を把握するだけではなく、さまざまな被害に対応できるような衣料品支援の在り方を考察し、今後の備えとしていく必要性を明らかにした。

すなわち、被災直後とその後の避難生活における衣生活の実態を把握し、生活再建のなかで衣服の果たす役割を考慮して、災害時に人々の衣生活がいかに壊され、取り戻されたかという視点から解明してきたことが意味のあることであった。その際に、これまで培ってきた現地の職員、ボランティア、仮設住宅・復興住宅住民たちと共に衣生活の問題に取り組み、被災者へのインタビューをまとめることによって、衣服が特に高齢の方々の精神的な支えとなり、衣生活があらたな「生きがい」を生むことが明らかになった。

さらに、被災地で偶発的に起こった女性たちの手芸を中心としたグループの結成が、被災者の精神的な支えとなっていることを示すことができ、更には一般の独居高齢者や施設入居高齢者の問題として、衣生活をとおした生活の豊かさを提案していく可能性が示唆された。

その結果、以下のような実態が明らかになった。

仮設住宅に集まった女性たちにインタビューを行った結果、生活上の不便さや、多くのものを失った心の痛みから立ち直ろうとする人々が行ってきた活動の中で、手芸活動に関わる事例をまとめることができた。

女性たちは趣味のグループとして手芸活動をしており、それらはいくつかのグループに分化していったことを明らかにした。

被災後10年近くを経過しても継続しているグループが存在していることは、手芸という共通の目的がさまざまな要素を含んでいると考えられる。すなわち、最初は仮設住宅での仲間作りや小さな日用品の製作による時間つぶしであった手芸が、やがては新たな日常生活への一歩としての役割を持ってきたのである。インタビューでは、一心に何かをすることでつらいことを忘れられるという声が多く聞かれた。ものづくりは、新たな生きがいを生み出す手段としての役割を持っていたと考えられる。

また、趣味から始めて組織づくりがなされ、製作品が販売されるようになったグループもあり、収入の道も開かれてきている。

このようなさまざまな活動において、基本的には収入を目的としたわけではなく、創造の喜びが支えであったことが明らかになった。しかし、ある程度の収入が目指された活動は、それぞれ製品としての価値を持ったものを作り出し、継続されている。

本研究は東日本大震災の被災者たちの生活再建に関して、さまざまな支援活動が展開されていたことを調査していた。しかし、長期にわたっての支援はしだいに縮小してきていることに注目して、支援ではない現地の女性たちの震災後のグループ活動の意義を考察することを試みた。

その結果、女性たちのグループ活動の実態を明らかにし、手芸や裁縫などによる身近な作品の製作を通して、被災者たちの心のケアや生きがいの創出につながったことを見出し、収入を得る手段として発展していった事例を把握できた。また、単に被災地に物資を調達するのではない被災者の心の支援の在り方について新たな方法を生み出すことが必要であることを示唆できたと考える。

引用文献

菊池直子・久慈るみ子・山岸裕美子・佐々井啓

東日本大震災後の生活再建過程における被災者たちのものづくりと生き方 女性たちによる「手芸」活動の観点から

国際服飾学会誌 No.60、39 51、2022年1月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊池直子、久慈るみ子、山岸裕美子、佐々井啓	4. 巻 60
2. 論文標題 東日本大震災後の生活再建過程における被災者のものづくりと生き方ー女性たちによる「手芸」活動の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際服飾学会誌	6. 最初と最後の頁 39 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 菊池直子、佐々井啓、久慈るみ子、山岸裕美子
2. 発表標題 東日本大震災後の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法（第3報）岩手県陸前高田市・大船渡市での調査
3. 学会等名 日本家政学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久慈るみ子、佐々井啓、菊池直子、山岸裕美子
2. 発表標題 東日本大震災の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法 第2報
3. 学会等名 （一社）日本家政学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei SASAI, Rumiko KUJI, Naoko KIKUCHI, Yumiko YAMAGISHI
2. 発表標題 Building communities among women through handicrafts and sewing in the disaster areas struck by the Great East Earthquake
3. 学会等名 Asian Regional Association for Home Economics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々井啓、久慈るみ子、菊池直子、山岸裕美子
2. 発表標題 東日本大震災の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法 第1報 宮城県石巻市での調査
3. 学会等名 (一社)日本家政学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊池直子、佐々井啓、久慈るみ子、山岸裕美子
2. 発表標題 東日本大震災の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法 第1報 岩手県釜石市・大槌町での調査
3. 学会等名 (一社)日本家政学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ikuko BAMBA, kei SASAI, Rumiko Kuji 他11名
2. 発表標題 Survey on seasonal variation of living environment of temporary housing in Ishinomaki-City, Miyagi Prefecture
3. 学会等名 Asian Regional Association for Home Economics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Midori OTAKE, Kei SASAI, Rumiko Kuji 他10名
2. 発表標題 Impact of the East Japan Earthquake on high school student's life awareness
3. 学会等名 Asian Regional Association for Home Economics (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	菊池 直子 (KIKUCHI Naoko) (10131997)	岩手県立大学盛岡短期大学部・その他部局等・名誉教授 (41201)	
研究 分担者	久慈 るみ子 (KUJII Rumiko) (40153291)	尚絅学院大学・総合人間科学系・教授 (31311)	
研究 分担者	山岸 裕美子 (YAMAGISHI Yumiko) (60291861)	群馬医療福祉大学・社会福祉学部・教授 (32307)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------